

●第13回 全国X線CT技術サミット

臨床で生きるボリュームデータの有用性： 頭部&末梢血管

座長集約

筆者が担当したのは「臨床で生きる3Dボリュームデータの有用性」のセッションの最初の「頭部&末梢血管」であり、2名の演者に講演をお願いした。

まず、頭部領域では亀田メディカルセンターの加藤光久氏に「脳血管内治療における3D-CT Angiography」というテーマで講演をしていただいた。亀田メディカルセンターでは、脳血管障害症例における開頭手術や血管内手術が多く行われており、脳神経外科領域の3D-CT Angiographyの経験が豊富な加藤氏は、まさにこの領域の演者として適任な方である。今回は、脳動脈瘤と頸部頸動脈狭窄における血管内手術における三次元画像作成のポイントを明確に示していただいた。血管内手術では、血管計測が両疾患においても非常に重要であり、画像の精度が重要であることが会場の方にも感じていただけたと思っている。

次に、末梢血管では地元沖縄の豊見城中央病院の金城一

平野 透 札幌医科大学附属病院放射線部

史氏に「沖縄県内における下肢3D-CTAの現状と適正化への取り組みについて」というテーマで講演をしていただいた。沖縄CT研究会の共同研究であり、今回の沖縄サミットへの地元のみなさんの強い意気込みを感じる発表であった。対象施設での下肢3D-CTAの撮影条件がかなり異なっており、下肢血管における各部位でのCT値の変動も施設間で異なっていることが報告された。また、血管径が細く造影効果によっては描出が難しくなる下腿部の血管描出について、ファントム実験や症例の解析によって推奨される撮影条件が報告された。下肢3D-CTAにおける血管描出は、造影剤使用量や撮影時間など各施設で苦勞されている領域であり、今回の検討は多くの参加者の参考になったのではないかと考える。

今回のこのテーマに関して、2人の演者とも明確な内容で講演されており、充実したセッションであったと感じている。加藤氏、金城氏にはとても感謝している。

座長集約

ボリュームデータの取得は、CT装置、ワークステーションの発展に伴う恩恵であり、撮影時間、撮影範囲、画質などの課題克服により、ますます形態診断および術前検査、治療計画に役立ついくものと思われる。

今回「臨床で生きる3Dボリュームデータの有用性」というテーマのもと、頭部&末梢血管部門で2名の演者に発表していただいた。亀田メディカルセンターの加藤光久氏は、脳血管内治療における3D-CT Angiographyの役割について発表し、頭頸部血管病変の血管内治療術における術者側の視点に立った血管描出、血管計測等の重要性を強調した。また、治療に携わる医師とのコミュニケーションも重要とし、実際に脳血管内治療の助手として携わっている経験も含めて述べていただいた。

島袋 真 豊見城中央病院放射線科

次に、沖縄CT研究会を代表して豊見城中央病院の金城一史氏が、沖縄県内における下肢3D-CTAの現状と適正化への取り組みについて発表し、検証協力施設の臨床画像データ、および自作ファントムによる実験データをもとに統計学的見解を述べた。下肢末梢血管の描出能向上を最終目標とし、各種CT装置の特性に依存することなく、スキャンタイム、単位時間あたりの体重毎造影剤量など各種パラメータを検討中であるということであった。

以上、両氏の発表を要約すると、CT装置の性能把握、疾患および治療法への理解はもちろんのこと、臨床医や周辺施設とのコミュニケーション（共同研究）も重要ということになるのではなかろうか。